

1:

和の国、うるティの部屋。

「あああああ！！！！ 脚がムズムズするでありんすうう！！！！ おっらああ！！ 早くチンポだせえ！！ 精子かけろ、駄チン野郎！！！！」

ガン！ ガン！ ガン！ ガン！

うるティが右手で男の顔面の頬を掴みながら自分の顔に近づけ、頭突きしまくりながら射精を要求していた。

「まっ……任せてくだひゃい、うるティ様！！ 必ずや、あなたの身体のムズムズを直してみせます！！」

「だったらさっさと直すであ・り・ん・す！！」

ガン！！ ガン！

うるティの頭突きを受けて意識を失いそうになってしまう男だが、うるティの可愛らしい顔が目の前にあることと、彼女の濃厚なメス臭を間近で嗅いでいることによって、自分とチンポを奮い立たせて意識を保っていた。

うるティは悪魔の実の副作用が悪化してしまっており、かなり狂暴化してチンポを求めるようになってしまっている。

現在は特に下半身、それも脚が疼いているようで、男の精子をそこに求めていた。

「ふんっ！」

「ぐぎゃ！？」

「ああっ！ はあ！ はあ！ ほら！ さっさとするでありんす！！ さっきからムズムズが止まなくて……イライラするうう！！！！」

男を放り投げると、両足がたまらないという感じでうずうずさせ始めるうるティ。

男はそんなうるティを改めて確認する。

青色にピンクのインナーカラーが入ったハイカラな髪色の頭。

その頭から角が出ているのが少し気になるが、強気で短気で狂暴なうるティの性格をよく表しているのも、逆にアクセントが加えられており、男のチンポに活を入れていた。

そして、ニット生地 of 洋服に包まれたデカパイと、見事にくびれている腰。

そしてその下にミニスカで包んでいるデカ尻に、健康的な太腿と脛が肉感的に伸びている。

可愛らしいが凶悪な足を包んでいる赤いハイヒールもエロさを際立たせており、見ただけで勃起してきた。

「エロい目で見てるくらいだったら、早く何とかしやがれ！！」

脚が疼いてしょうがないうるティが男に凄みを効かせてくる。

額の欠陥は浮き上がっており、海賊の女という凶悪さを身体全体から滲み出させていた。

だが男は臆することなくうるティに近づき、肉感的な太腿に自分の顔を持っていく。

「んんんっ！！　んんっ……んんっ……」

うるティが悶えながら下半身を震えさせている。

下から見上げるニット巨乳が魅力的だが今それよりも目の前にある健康太腿を相手にしなければならない。

副作用によって疼いて痙攣している太腿は、水を弾きそうなくらいの張りがあり、見ただけでプルプルしているのが分かる。

男はその健康的でナチュラルな肌の色の瑞々しいが少し筋肉のありそうな太腿に両手で優しく振れた。

「おおっ！？　おおおおおおおお！！！」

その瞬間、うるティが激しく両脚をガクガクさせながら艶のある雄叫びを上げる。

「んんっ！？　んおっ！！　脚……気持ちいいいい♡♡♡」

かなり副作用が強くなってしまっているうるティの脚は、ほぼ性感帯と言っていいくらいの感度になっており、チンチンの実を食べている男の手が触れただけで、軽くイきそうになっていた。

男は脚を触られて感じているうるティをさらに気持ちよくするため、太腿を揉みこみながら、股に頭を持っていき、顔をうずめたり挟めたりし始めた。

ムンギュッ！　モンギュッ！　ムギュッ！！

「おほっ！！　お前！！　顔っ！！　ほおっ♡♡♡」

男の顔の感触が太腿から伝わってきて、股を広げてその快感から逃げようとするうるティだが、男が両手でそれを抑え込んでいく。

本来であれば、うるティならこんなチンポ男の力に負けるはずがないのだが、副作用と快感により、一般的な女性レベルの筋力まで落ちていた。

「はあ！　はあ！　あんむっ！　ちゅっ！　れろっ！　ぢゅるっ！！」

さらに男は頭を動かしながら、健康的な肉感むっちり太腿にキスしたり、舐めたり、むしゃぶりついたりした。

「おおおおおお！！！！　脚！！　太腿！！　こんな駄チン男に犯されてるなんて！！　もうダメえ♡私、可哀そう~~~~♡♡♡」

蟹股で悶えながら頭をそらせつつ快感を感じるうるティ。

男はうるティの太腿を本人が言っているように犯しまくる。

「れろっ！　ぢゅるっ！！　れろっ！　れろっ！！」

顔をモゾ付かせながらバランスよく左右の太もも肉にむしゃぶりついては、時折吸い付き、味を摂取していく。

うるティの太腿は味こそしないのだが、うるティのそもそもの女の匂いと、スカート内の蒸れたメス臭、

さらに股間の匂いが合わさり、男に快感の味を与えていた。

敏感な内太腿にキスされながら、外側は両手で卑猥に揉みしだかれていく。

「んおっ！！ おほっ！！ てんめえ！！ 好き勝手私の太腿犯しやがって！！ もっとキスしやがれえ～～～！！！」

悪魔の実の副作用のため、決して副作用を抑えたいだけで男に犯されたいわけではないうるティの感情がめっちゃめっちゃになり、言動に矛盾が生じてくる。

男を拒みながらも、太腿に力をいれて、もっと太腿キスを強請ってきた。

「うんむっ！？ ぢゅちゅう！！ れろっ！！ んれろっ！！」

うるティのアピールに負けじと、男も太腿をがっちり握りしめながらキスしまくった。

魅惑の肉感太腿は、力が入っているため、多少固くなっているが、しっかりと肉の乗っている部分は指が沈み込み、女の身体の柔らかさを感じることができる。

そんな健康太腿を掴み、顔を挟めながら時折上部をのぞいてみると、うるティの青色のパンツが見えた。

うるティのイメージに合った濃い青色のパンツで、既に膣口付近にシミができているため、性的に感じているということが確認できる。

「ぢゅるっ！！ ぢゅううううう！！！」

うるティのパンツを見て興奮した男は、右の内太腿に力強く吸い付いた。

「んんっ！？ んぐうううう！！ チンポ男に！！ マーキングされてる！！ 私の太腿！！ マーキングされて……イっ……くうううう♡♡♡♡♡♡」

「ぢゅううううう！！！！！！！！」

うるティは太腿に男のキスマークを付けられながら、激しく絶頂してしまう。

性感帯となっている太腿で絶頂したことで、全身をガクブルと痙攣させてしまい、男がその痙攣を抑えるために必死に太腿を押さえつける。

そのまま痙攣絶頂を抑えていると、うるティの股間から絶頂によって漏れた愛液が垂れてきたため、それを優しく舐めとっていく。

「ぢゅっれろっ！ れろっ！ れろっ！！」

「んあっ♡♡ ちょっ！ こらっ♡♡ あちきのラブジュース、舐めるなでありんす♡♡♡ んんっ♡♡」

絶頂を感じて少し収まったのか、甘い声を漏らすうるティ。

だがうるティが一度絶頂に導かれても、それにより男根のほうには溜まりに溜まってしまったため、男が立ち上がってうるティを抱きしめた。

「あんっ♡♡♡ てめえ！！ 何、気安く私に抱き着いてんだ！！！」

「うるティ様！！ どうやらあなたの身体は、悪魔の実の副作用によって、全身マンコ化しているみたいなんです！！」

「全身マンコ化だとお!？」

うるティの反応を見ながら、既に全裸の男が勃起肉棒を彼女の太腿に挟んで、素股を始める。

クニクニクニクニクニクニクニユ!!!!!!

「どうですうるティ様？ 太腿でチンポ感じて気持ちいいでしょ？」

「こんな……チンポが……気持ちいいわけ……」

男の抱き着きを剥がすことができずに、なすがままに太腿コキされてしまううるティ。

いやでも絶頂した太腿からチンポの熱さと太さと、硬さが伝わってきて、脳に直接快感を訴えかけてくる。

「んっ♡♡♡ チンポっ！！ お前のチンポ！！ 糞駄チン野郎が！！！！ もっと激しく扱いて！！ さっさと精子射精しやがれえ！！！！」

性感帯でチンポを感じてスイッチが入ったうるティは、太腿を力いっぱい絞めて、肉棒に刺激を与える。

「うっ!?　くっふっ!?　うるティ様!!!　もっと!!　金玉まで締め上げてください!!!」

「こんの!!! 生意気に私に要求してきやがって!!! チンポ野郎が!!! お前の金玉もチンポも……潰してやるううううう!!!!」

絶頂で多少力を取り戻したうるティが、凄まじい力で太腿を閉じて、チンポを締め上げてくる。

「うおおおおおおお!!!」

瞬間、太腿が一気に硬くなり、かわいい顔をしたうるティの太腿筋肉によって、金玉と肉棒が押しつぶされていく。

強烈な圧迫感と快感が一気に押し寄せてきて、男の肉棒は脈打ち、金玉から精子が放り上がってきた。

「んっ♡♡ 感じる！！ チンポから射精！！ ドクドク脈打って♡♡♡ 私の太腿で、汚えもん出すんだろ！！」

うるティが男を睨みつけながらも、チンポを逃さないようにがっちり抱きしめ、太腿を占めあげる。

男もうるティのチン媚に負けじと腰に回している手に力を込めて、身体を密着させた。

クニクニクニクニクニクニクニクニクニ!!!

そして射精するために激しく情けなく腰を振りまくった。

うるティの太腿の中でチンポがピストンされ、膣口から漏れてきた愛液と、我慢汁で滑りがよくなり動きもよくなる。

「んっ~~~~♡♡♡ んあっ♡♡♡ 太腿♡♡♡ 犯されて♡♡♡ 私も♡♡♡ また……♡♡♡♡」

うるティが顔を蕩けさせて、頭を反らせ絶頂の予兆を感じさせる。

男もうるティの絶頂に合わせて射精するためにさらに身体を強く押し付けた。

彼女のニットデカ乳が男の胸で押しつぶされて、柔らかい感触が全身に響き渡り、快感となってチンポに行き届く。

「んっ！！　くっ！！　行きますよ、うるティ様！！　太腿で……孕め！！」

男は射精の瞬間、両手でうるティの尻肉を鷲掴みにして、亀頭を股間に向けて照準を合わせて、盛大に太腿内射精した。

ドッピュウウウウ！！　ドッピュウ！！　ドピュッ！！　ピュルッ！！　ピュルッ！！　ピュルルルルッ！！

「ん　ん　っ！！　んおおおおおおお♡♡♡　イクッ！！　イクうううう♡♡♡　太腿で……孕む♡♡♡♡♡♡」

男の肉棒を性感帯太腿で感じながら、さらに射精によって精液もぶちまけられて、盛大に絶頂してしまううるティ。

その魅惑の肉感太腿は射精が終わっても精液を刷り込むために、ずりゅずりゅとチンポに挟みかかっていた。

「はあ……はあ……はあ……」

盛大な射精の虚脱感で倒れそうになっている身体を何とか支えながらうるティを抱きしめる男。

「はあ……♡♡　はあ……♡♡　この……チンポ野郎……こんなに私の太腿で射精しやがって！　太腿で孕んだらどう責任とんだよ！！」

「はあ……はあ……その時はちゃんと結婚しましょう！　子供も認知しますよ！！」

「こっちが願い下げだチンポ野郎！！　んあっ♡♡♡　いつまで尻揉んでんだ！」

少しずつチンポ脳化してきたうるティの尻を揉み続けながら、チンポを太腿に今だ擦り付け続ける男。

反発心はあるもののなんだかんだうるティも男に抱かれたまま、自分でも太腿を絞めて、そのまましばらくチンポを感じ続けるのであった。